

精神分析のはなし 第 16 話 「海辺にて」

JAM: ひとは昔から女性を悪く言ってきました。それは「共通の場」と言われるもので、はるか古代に遡ります。「女、ひとはそのひとを女と言った *dit femme* = 中傷した *diffamme*」とラカンは述べていました。彼はことばに隠された秘密のメッセージを聞かせるための、言葉遊びの才能に長けていました。

私は「はるか古代に」と言いましたが、それは有名なギリシャ人ヘシオドスが存在するからです。彼は男性という人種からかけ離れたものとして女性を語った、最初の人物と思われま。それから古代のギリシャ文学では女性をたえまなく語っていましたが、それはコピー—もちろん悪いコピーのことです—とか、策略、災禍という用語すら用いつつ、語られていました。ですから女性への中傷は、たいへん古くに始まったことでした。

人類の歴史において、社会的紐帯とは、男性、男が中心とされてきました。すべての社会的シンボリズムは、男性性の栄光をうたうものとなっています。なにかがたいへん純粋なカタチで保存されていたとすることができます。カトリック教会のなかでは、教会のシンボリズムのなかで女性は一つの場をもっていますが、それは母として、かつ処女として、です。処女という理想と、母性という理想が、「共通の場」を覆い隠していて、それが続いています。

そして私たちは現代を生きる者たちであり、それはもう過去のものであるとすることができます。実際、女性は発言できるようになり、権利を理解させ主張することができるようになったことは、その前に何かが起こったからだと考えられます。そして一括弧 () として付け加えてもよければ、ですが—、フロイトはおそらくそれについてなにもしなかったわけではないでしょう。彼は女性たちの言うことを聞いたからです—誰も、夫も、愛人も、医者もそれまで聞きたがらなかった、女性たちの言うことに、フロイトは耳を傾けたのです。フロイトは彼女たちに耳を傾けながら、精神分析を発明しました。

ですから、私たちの文明において、長い時間にわたりもっとも大事なことが起こったのは、たぶん 20 世紀において、なのでしょう。それはその、女性の権利の主張です。しかしそれは文明の掛け金に相変わらずとどまっていることも確認しなければならないでしょう。女性とともに、ひとは何をするのか？女性を覆わなければならないのでしょうか？それとも覆いをとる必要があるのでしょうか？視線に彼女たちを提供すべきなのでしょうか？それとも彼女たちを視線から隠さなければならないのでしょうか？

彼女たちが男性のところに足しげく通うのを放っておくべきか、それとも男性から離れたところに置くべきなのでしょう？—なぜなら彼女たちは欲望される存在、あまりにも欲望をそそり、彼女たちが世界秩序に混乱を導き入れるから—、そのようにすべきなのでしょう？

私たちのなかでは、今日、全体的に言って「私たちは女性に対する偏見を越えたところにいる」と、かなり言ってよいと思います。しかしながら、やはりひとは相変わらず女性のための正義を主張しなければならない状態にもいます。それはどのような不正のことを言っているのでしょうか？そしてなぜあの、あまりに共通な、「共通の場」が存在しているのでしょうか？なぜこのステレオタイプがしつこく残っているのでしょうか？

この点については、お話したい逸話があります。私の記憶に刻み込まれている瞬間のことで、バカンスのときのエピソードです。私はリュシルという孫娘と一緒にいました。リュシルは当時、3歳でした。私のまえを、彼女は海辺を走っていて、祖父である自分は彼女のあとを追っかけていました。彼女が私のまえを駆けていくままにしていたというのも無駄なことでしょう。私は追い抜かなかったのです。そうできたでしょうが、彼女に喜んでもらいたくて、彼女の勝利に任せていました。

そして走りながら、孫娘は私のほうを振り向き、私がちゃんと後ろにいること、彼女のほうが速いことを確認していました。私は彼女をみて喜んでいました。そのときこんなフレーズを私は言ってしまいました。「それどこのズボン？ズボンに穴が開いているよ」と。彼女は「そんなことない」と言いましたが、でも本当だよと言うと、「ちがう」と繰り返し言っていました。そうしたら彼女は走るのをやめて、泣き始めたのです。彼女は怒りで泣いていました。

これはどちらが正しいのでしょうか？祖父である私でしょうか。孫娘のほうでしょうか？祖父は完ぺきに間違っていないと言うことは、本当にできます。彼は事実を言っていて、それが孫娘には不快で、気に入らなかったのだ、と。彼女はそれに耐えられなかったが、彼女は慣れなければならない、と。

それは彼女にとり心地よいか心地よくないか、だけではありません。現実というものが存在

して、客観的現実というものはすべての人に押し付けられていて、彼女にとってはそれはがっかりすることでした。世界の法を作ることは、彼女の喜びではなかった、事実、ズボンに穴があいていて、彼女のズボンに穴があいているよと言われることに我慢ができたとき、彼女は成長するだろうということです。

そしてそれこそが教育であるとも言えるでしょう。少女の教育の歴史のなかで、非常に熱心に行われたことです。大人になるとはそれであると、言うことができます。そこに現にあることを受け入れること、たとえそれが心地よいことではなくても、です。精神分析の内輪の言葉で言えば、「快原則は現実原則に場を譲らなければならない」とでもいうところでしょう。しかしながら、リュシルには罪が、自らの快しかしない子どもであるという罪があるのでしょ

か？むしろこう問うことはできないでしょうか。いったいどんな悪魔が祖父をそそのかして、不愉快な情報、「おまえのズボンには穴があいているぞ」という情報を伝えたのだろうか、と。それはおそらく正確な意味において、真理だったでしょう。しかし本当にそれは、海辺で、必要不可欠なことだったのでしょ

か？彼女が全身全霊で走っていたとき、彼女が歓喜していたときに、彼女には見えなかった引っ掛け傷による穴の存在を知らせることが、必要不可欠だったのでしょ

か？ひとが他者のズボンにあいた穴を知らせるのは、相手を愉快にするためではありませんよね。ひとはつねに、「相手のためを思って」と言うことは可能です。ただこの言い方はつねに最善の言い訳ですね。他者のためを思って、と言うことです。そして、(真理を)知ることは喜びにはつながらないものだ

と、それもよく知られていることです。古代ギリシャに遡るならば、当時、悪い知らせをもたらす者は、死にふさされました。悪い知らせとともにもたらされる不快感のために、ひとはその者を殺していたのです。

不快感をもたらす真理ほど、最悪なものはありません。ズボンのまわりを巡っている「素敵な王様ダゴベール」の歌[18世紀に生まれたとされる歌]について考えてみましょう。どうして素敵な王様ダゴベールと、言われるのでしょうか？なぜ彼は素敵(よい)、なのでしょう？それはズボンについて素敵な(よい)大聖エロアの不適切さを善良にも迎え入れているから、彼は素敵なのです。しかし通常は、王が裏返しにズボンを履いてしまっている場合、正しく履くようにとひとは王にむかって言うことはありません。むしろ王宮の人たちみんなが、裏

返しにズボンを履くようにするでしょう。そんなものです。もし王に対して「みんなと同じようにしろ、正しくズボンを履け」とひとが言い始めるなら、フランス革命はもうそこまで来ています。

リュシルは素敵な王様ダゴベールとは全然違います。彼女はまだ3歳ですから、ひとに何かされるがままにはしません。ズボンに関して、彼女は言われたこと、正しいことと正しくないことをまったくいい風に解釈していません。実のところ、彼女はむしろハートの女王を思わせませぬ。『不思議の国のアリス』のなかで、ハートの女王は、わずらわしい人がいると「首をはねろ」とのたまう人物です。

この話のなかで、結局のところ、誰がいちばん捕らえられたのでしょうか？それは祖父です。この事件における間抜けな人物、それは間違いようがありません。私のことです。私は、子どもの虐待者でしょうか？私は孫娘と遊んでいて、すごく楽しかったのです。そして私は彼女を泣かせてしまいました。そして信じてもらえると思いますが、泣いているばかりか、リュシルはもっと勝っていて、私は自分に注がれる視線を感じていました。妻や、私の娘—リュシルの母—の視線です。捕らえられたのは私のほうで、おそらく私は真理を告げた、にもかかわらず、真において存在したのはリュシルでした。私は真理を語った、にもかかわらず、それが問題だったのではなかったのです。では何が問題だったのでしょうか？

それはズボンにあいた穴を指摘すること、それは他のことにつながっているということです。リュシルは3歳になったばかりでした。しかしすでに女性であり、彼女は引っかき傷を指摘されることが耐えられませんでした。彼女にはオーギュストという名のいとこの男の子がいるのですが、引っかき傷のせいで、彼女は彼と比較されることに引き戻されるからなのです。比較が理由ではありあせん、おそらく、こう言うことが出来ます。決して「ないもの」に対して、「ないもの」は欠けてはいけません。そして「存在」が存在し、「非—存在」が存在しないと云えます。「はく奪」は存在をもたず、それは純粹に想像的なのです・・等々。私はここまでにします。

しかしながら、想像的なものとは、それでもやはり現実的な効果をもつものです。ズボンにあいた穴です。それは欠陥で、小さな鋤のように、私はその小さな欠陥を指で指摘しなければならなかったのです。「それは決して性別のある、誰かとしてはならないものです」とかつてひとが言っていたように、です。それこそまさに、ひとりの女の子と同様、ひとりの女性としてはならないこと、そのものです。本来の意味における、呪いです。

私はうまく話せませんでした。私の愛するリュシルをかたくなにさせてしまいました。祖父として、私は男性の意地悪さを我慢させてしまったし、私はそうとは知らずに、そう願ってもいないのに、男性、不器用な人たちがするように、ひとつの辛い点を狙ってしまったのです。彼らはそうとは知らず、望んでもいないのに、女性を苦しめてしまうのです。言うべきことを言わず、彼らが挑発したにもかかわらず、彼らは驚くのです。

私は本当にわからせるために孫娘を泣かせてしまったことを誇ってはいないし、彼女は理解できなかったのですから、私が悪かったなと思っています。本当にズボンに穴が開いていたのだから私は正しいのだ、彼女は慣れなければならなかったのだと言うこともできたでしょうけれども、大きくなるとはそうです、大人になるということ、成熟するとはそれです。

精神分析のなかでさえ、ファリサイ人[偽善者]というのがいて、「世界の秩序をあきらめて受け入れることを学ぶことが、精神分析なのだ」と信じています。すべてのひとが言っているからと言うのですが、あなたは精神分析が順応主義の学校であると、思っているのでしょうか？

違いますよ。精神分析はまったく、大人がつねに正しい、などと、教えてはいません。現実原則のためにリュシルが快原則を放棄しなければならないだろうと言うことは十分ではありません。その置き換えがなされたときに、彼女が、あなたや私のように、穴は穴である、ひとつの穴はひとつの穴である、と知るだろうと、言うので十分ではありません。とりわけ、彼女が3歳の夏のあいだ、そうであることができた欲望のあの存在であることに留まりつづけなければならないでしょう。リュシルの涙、私はまだ思い出すことができますが、その涙は私にとって解釈の価値を持ったのです。

私にとって、それはひとつの欲望が現存しているということであり、悪い欲望—これはフロイトが警告したのですが—男性における、女性性を価値下げしたいという欲望の、あらわれなのです。それは私自身の分析において、かつて分析した欲望であり、しかしながら海辺でその朝、この欲望が時々こっそりと再出現しかねないことを、認めなければなりません。私が深く考えもせず言うことがらのなかに、認められたのです。リュシルから私が受け取った教訓であり、おそらく、私が彼女にしたプレゼントと同じような価値が、そこには確かにあったのです。